

フランスの出版社からは返事が来た。  
日本の出版社、学会からは？  
― 岩波文庫「恐るべき子供たち」が書店から消えた ―

松村 茂治

はじめに

本稿では、本誌第三十六号に掲載した、岩波文庫「恐るべき子供たち」における誤訳問題に関するその後の状況について述べるつもりだが、その前に、出版物の誤りについて、筆者が経験したいくつかの事例を簡単に紹介する。

仏訳版「伊豆の踊子」について

本誌第三十七号のエッセーで、「伊豆の踊子」を取り上げた際、参考のために読んでいた仏訳版「伊豆の踊子」( Livre de Poche ) に、小さな誤り(湯ヶ島と湯ヶ野の取り換え)を見つけ、そのことを出版社に知らせたものか

どうか迷っている旨を記したが、結局、出版社に手紙を書いた所、間もなく返事が来たので、そのことを報告する。誤りがあったのは、第四章の冒頭である。あの有名な書き出し、つづら折れになった道を上って行って天城峠で踊り子たちに追いついた「私」(学生)は、その後、旅芸人の一行と一緒に峠を越え、湯ヶ野で二日投宿することになる。第四章は、そこから下田へ向けて宿を發つ朝の描写から始まる。

その次の朝八時が湯ヶ野出立の約束だった……

ところが、この部分の仏訳が、以下のようになっていたのである。

Nous avions formé le projet de quitter Yugashima  
Le lendemain matin à huit heures……

《Yugashima》以外は、原文が正しく反映された仏文になつていと思われる。おそらく、仏訳だけを読んでいたら、気づかなかつたらうし、日本語でそうなつていたら、読む飛ばしていただけないだろうか。こんな細かい所に気づいたのは、三十七号のエッセーを書くために、湯ヶ野に宿を予約し、そこまで行って来たからである。

当該の仏語訳には、S.SuzukiとH.Suematsuという二人の日本人らしき人物の名前があげられている。翻訳にあたっては、日本の歴史・文化や日本語独特の表現を正確にフランス語に移し替えられるよう、注意を払って取り組んで来たが、まさに上手の手から……ということだったのだろう。

湯ヶ野と湯ヶ島といえば、天城峠の向こう側とこちら側の違いであり、この部分を取り違えたからと言って、作品の価値を左右するほどのことではないので、そのままにしておいても良かったのだが、本誌第三十六号で岩

波文庫「恐るべき子供たち」の誤りについて取り上げ、岩波書店に伝えたことがあったので、フランスの出版社がどんな反応をするのか知りたくもあり、筆者のフランス語作文の勉強も兼ねて、手紙を書くことにしたのである。

問題は、手紙がきちんと読んでもらえるかどうかである。相手は世界的な出版社だから、日に何十、何百通もの郵便物が届くであろう。多くのダイレクトメールのように、開封もされずゴミ箱行きとなつてしまえば仕方ないが、開封された後については、こちらで責任を負わねばならない。

肝心なのは、手紙の文章が、こちらの意図が伝わるようなフランス語になっているかということだが、もちろん日本語で書くようなわけにはいかない。語学学校の先生に見てもらふことも考えないではなかったが、フランスの出版社に注文をつけるに当たってフランス人の力を借りるといふのも忌々しい感じがしたので、そこは自重し、文章の拙劣なところはそのままにして、その足りないところを補うことに少し時間をかけた。

その一つは、原文(日本文学大系 第五十二卷)の第

四章の冒頭部分のコピーを用意することで、「その次の朝八時」の所が、《le lendemain matin à huit heures》に該当すること、「湯ヶ野」は《Yugano》と表記することを記しておいた。もう一つは、仏訳のコピーを用意し、《Yugashima》は、日本語では「湯ヶ島」という表記になる旨を示しておいた。

三つ目は、昨年伊豆を旅した際に利用した伊豆半島の地図のコピーである。そこには、踊り子たちが辿ったルートが分かりやすく描かれていたので、その中に、物語が始まった天城峠、前日の宿泊地となった湯ヶ島、そして問題となっている湯ヶ野の場所に印をつけた。これら三点を、拙い仏文を補うための資料として添付したのである。

先方がこちらの努力を真剣に受け止めてくれたとして、どれほど待てば、返事がもらえるだろう。手紙での返事では面倒なこともあるだろうと、こちらの e-mail アドレスを書いておいた。もちろん、こちらの言う通りに修正しろというのではなく、当方の指摘が正しいかどうか一度調べて欲しい旨も書き添えておいた。

一月ほど何の連絡もなく過ぎたので、やはり相手にさいた誤りは、以下の部分である。

「姫川は、大体、糸魚川と信州の大野を繋ぐ大糸線に沿っている。上流は長野県の鹿島鎗の山麓から出ているらしい。だがそれが海に注ぐまでは・・・」

大糸線に沿って流れている姫川なら、ここは「大野」ではなく「大町」でなくてはならない。他が全て実名になっているので、ここだけ仮名にする理由はなく、おそらく字画が似ていることによる誤植と推測し、新潮社に同人誌を送ると、早速、丁寧な返事をいただいた。筆者の指摘通り、文庫本の初版では「大町」だったが、改版時に誤植が生じたとのことで、重版時に修正することであった。

「大町」でも「大野」でも、事件の解決に障害を来すような間違いではなかったのは幸いだが、いや、支障があったら遠の昔に誤りに気づいていたということなのだろう。奥付には、平成十四年六十六刷改版とあるので、十五年以上直されずに来たということになる。筆者が手にしたのは、八十三刷なので、この間、何万人、何十万人もの読者がいたわけだし、中には鉄道マニアもいたはずだから、誤記に気づいていなかったわけではなく、気づいても誰も指摘を

れなかったのかと思いだした頃、パソコンに電子メールでの返信が届いた。一、二行の短い文面なので、そのまま掲載しようと思ったが、許可を受けてはいないので、その内容を示せば、こちらからの誤りの指摘に対するお礼と、誤りは近々修正することになるだろうというものであった。

短い文面であったが、手紙が読んでもらえたことそして伝えられたことが、きちんと伝わったらしいということで一安心である。誤りに関しては、日本人 (Suzuki, Suenatsu) の両氏あるいはどちらか一方に連絡をとって確認したのだろうか。世界的な出版社であるが、こうした素人からの連絡をないがしろにしないで対応してくれたことに敬意を表したいと思うのである。

「万葉翡翠」の中にも・・・  
新潮文庫の松本清張傑作短編(六)に収録されている「万葉翡翠」に、小説の舞台となった姫川について、誤りのあることを、本誌第三十二号のエッセーで取り上げ、出版社の新潮社に送ったところ、すぐに返事を頂いたことを、本誌第三十三号の「あとがき」で報告した。気づ

しなかったということなのだろう。

「伊豆の踊子」と「万葉翡翠」の誤りは、いずれも地名に関する誤記で、単純なケアレミスと言える。些細なことなので、あえて修正しなくてもいいようなものかもしれないし、逆に、些細なので修正も容易だったということなのかもしれない。

#### 優れたフランス語の参考書が姿を消した

「トレーニングペーパー フランス語・単語」(ニュートン プレス)は、筆者が定年後に考えていたフランス語再学習の準備のために、まだ現役中だった十年ほど前(二〇一〇年頃)に手に入れた参考書である。単語を学ぶための参考書だが、その前書きに「単語は文全体の中で覚えること」と謳っている通り、一つの単語に一文が対応している、無味乾燥に陥りがちな単語の学習を飽きずに続けさせるための工夫がなされた優れた参考書と受け止めて利用してきた。また、全ての例文がCDに録音されているので、携帯用の再生機に録音しておけば、通勤電車の中でも聞くことができるのも重宝だった。

そうした、個人的には優れたものと思っていた参考書の中に、こんな箇所を見つけたのである。

単語《visible》「見える・明白な」に対応する例文として、以下の仏文とその日本語訳があげられている。

《Mars n'est visible que le matin ou le soir.》  
「火星は朝方か夕方しか見えない。」

仏文もその和訳も、文法的には何の問題もない。問題はないどころか、この仏文が、《n'est... que》「・・・しか・・・ない」という、制限された否定を表す構文を用いていて、このように、ときに単語以外に、構文や文法の勉強もできるところが気に入っていたのである。星好きの人ならすぐに気づくところだが、明け方か夕方に見えない星というのは、明けの明星か宵の明星のことで、それは火星ではなく金星である。文法上の間違いではないので、黙っていても良かったのだが、気に入っていた本ということもあり、その誤りの訂正に一役買うことができれば、という思いで、発行元の出版社へ、一度天文の専門家に確認したらどうかといった内容の手紙を書いて送ったのである。このミスのあった少し前の頁に、アクセントの位置がずれている単語があったので

(《chônage》が《chomage》になっていた)、併せて指摘したような気がする。

出版社からは何も言っていないけれど、こちらの指摘したところが修正されているかどうか気になって、数ヶ月後、当該のトレーニングペーパーを購入した大型書店の、語学参考書のコーナーを見に行って驚いた。以前に書棚一段を占領するように置かれていたトレーニングペーパーのシリーズが、単語編だけでなく、文法編も読解編も、ことごとく姿を消していたのである。他の大型書店に行っても、状況は同じだった。

どういう事情があつて、トレーニングペーパーが全て姿を消したのかは分からない。ただ、このシリーズを優れた参考書と受け止めていたのは、私だけではないということが、ネットを見ていて気がついた。私の持っている単語編は、元は三千円弱の定価だが、ネットの古書店では、四千円弱の値がついていたし、文法編には、二万円弱の値がついていたから、この本はかなり人気のある参考書と言える。売れ筋ではあつても、絶版にしなければならぬ事情とはどんな事情なのだろう。

絶版は、あくまで会社の事情であり、監修に当たった

先生が、素人による誤りの指摘にプライドを傷つけられてへソを曲げた訳ではないであろうと思っているが、あまりのタイミングにずっと気になっている。出版社のニュートン プレスは、科学雑誌「ニュートン」の発行は続けているようなので、会社がつぶれてしまった訳ではなく、語学参考書部門を閉鎖したか他の出版社に譲ったかしたものである。会社の組織替えを巡って慌ただしくしているところに、たまたま私の手紙が舞い込んだのだろう。おそらく開封もされずに破棄されてしまったものと思うが、たとえ読んでもらえたとしても、手放すことを決めたシリーズのことなので、返事を出すまでもない・・・そんな状況だったのではないだろうか。ただし、一言言っておきたい。いかに無視しようとも、明け方か夕方に見えないのは、火星ではなく金星であるということとは、木の枝を離れたリングの実が地表に落ちるのと同じくらいの真実なのである。

波書店に送った。簡単な返事は来たが、具体的にどのような対応になるのかは分からない。  
誤り発見の経緯や誤りの詳細については、第三十六号をご覧頂くとして(本誌は、ウェブ公開されている)、以下にその概要のみを記す。  
当該文庫を読んで気になった五十二箇所について、以下の五つのカテゴリーに分けて整理した(気になった箇所はもつと多い)。ただしカテゴリーは便宜的なものであり、明確に区別できない場合があつたり、複数に重複する場合もある。

- 一、単語の取り違い
- 二、腑に落ちない省略
- 三、訳語の選択に関する疑問
- 四、不自然な、理解に苦しむ日本語表現
- 五、翻訳に当たったの状況理解の問題

以下に、第三十六号と一部重複するが、各カテゴリーに属する問題点の典型的な事例をあげておく。「」内が岩波文庫の訳、傍線部が問題の箇所である。

第一のカテゴリーは、「朝の十時半と、夕方の四時半に

### 岩波文庫「恐るべき子供たち」が書店から消えた

本誌第三十六号で、「恐るべき子供たち」(鈴木力衛訳 岩波文庫)に多くの誤りのあることを指摘し、当該誌を岩

は・・・」「アルコール中毒の母親・・・」「野次馬が（中略）赤い泥をじつと見ている」等である。

それぞれ、原文では《四時》《父親》《口》となっており、明らかに、原文の単語を取り違えているというものである。これ以外にも、固有名詞で書かれている登場人物の名前を別の人物にしているところが数カ所ある。

第二は、翻訳ということから、加筆や省略ということの問題にすること自体ナンセンスという意見もあるが、省略することで文が意味を失っているような場合は、読者としては困るのである。例えば、「若いジェラルムが自分の毛糸のマフラーと外套で包むのを見届けると・・・」では、傍線部の目的語が略されているために、何を（誰を）包んでいるのかわからない。原文には《同級生を》と明示されている。また、「我は愛す、（中略）そのけばげばしきスカートを、その大きな、いびつなショールを、\*\*\*」は、主人公が朗読するボードレールの詩だが、\*部にあるべき三語が略されている。これら以外にも、原文に明記されている教語あるいは一文が省略されていて、意味の分からない文になっている所がある。

第三は、単語の取り違えと似ているが、読んでいて、思わず吹き出してしまうような「迷訳」とでもいうべき所である。例えば、「それは、（中略）切手やビー玉の取引所

を開くのに屈強の広場であり・・・」は、子どもたちがたむろする広場についての形容だが、《危ない》くらいの訳が妥当だろう。また、「ダルジュロスは学校の雄鶏であった。」も、明らかな誤訳で、原文の《cock》には、《雄鶏》の他に《伊達男》の意味があると、辞書には出ている。もう一例をあげれば、「『こいつは薬①だ。薬になるんだ②。毒になんかになるものか③』ポールはそう云って・・・」の中には、誤訳と訳者の創作が入り交じっている。傍線部①の原語（*trouie*）には《麻薬》の意味があり、広義には薬かもしれないが、読者を誤解に導く訳である。また、②は明らかに訳者の「創作」で、原文は《彼は麻薬をやっている》であり、③も同様、《彼が毒をくれることはないだろう》である。上記以外にも、日本語として不自然であったり意味が通じなかつたりする所が十カ所以上あった。

第四は、訳語が適切に選ばれたかという意味では、第三に、状況が適切に把握されているかという意味では、次に述べる状況理解の問題に該当するが、日本語表現としての不自然さ、分かりにくさが目立つ訳文である。

例えば、「この青白い顔の生徒（ポール）は、（中略）怪しげな道具でふくらんだ上衣のポケットの前に出るといっても途方にくれてしまうのだった。」の文では、主人公（ポール）が、目の前にいる懂れの友人（ダルジュロス）

のポケットが膨らんでいると気圧されてしまう、といったことを述べているのだが、普通の日本語では、それを「ふくらんだ上衣のポケットの前に出ると」とは言わない。また、「雪は飛び交い（中略）あちこちから、くらがりのあいだに、口を開いた赤い顔や、目標を指し示す手が、暗闇の中にくつきり浮かんだ。」は、雪合戦中の子どもたちの様子を述べたものだが、傍線部が重複している。さらに、「彼女（エリザベート）の心は、部屋のすみずみまでパツと明るくなった。」では、主語と述語の関係が明らかに捻れており、日本語の分かる人が訳しているのだろうかと思いたくなるような訳である。

第五は、今まで述べてきた訳語選択や日本語表現にも関係するが、訳者がどのような状況を想定して翻訳に当たっているのか理解に苦しむとともに、ときに意味が正反対になつていような所である。

「医者（中略）毎日やってくる来てはあれこれ命令を下し、必要な金を渡し、命令通り実行されたかどうかを確かめてから帰って行くのであった。」は、往診に来た医者が、指示が実行されたかどうかを確かめてから自分の家に帰っていくような訳だが、実際は、指示が実行されたかどうか、確かめるために往診先へ戻ってくるのである。また、「小使の細君は気のいい女で、少年の体を洗ってやり、家に

帰らせようとした。」は、雪合戦で怪我をして意識を失っている少年を、学校の用務員とその妻が看病しているところだが、この時点で少年は気を失っているのでまだ帰れないのである。傍線部は、家に帰らせるのではなく、少年の意識を戻そうとした、ということである。「（雪合戦の状況について質問され）一人の生徒がジェラルムの代わりに答えた。」とあるが、原語の意味からも前後関係からも、ここは「ジェラルムが答えた」としないと辻褄が合わないのである。「孤独で暮らすというポールが胸に温めていた計画も、アガートが出て行ってしまったために、実現不可能になった。」は、この文章だけでは人間関係が分かりにくい。状況としては、一緒に住んでいたアガートが出て行ってしまったので、一人で暮らすことが「可能」なのである（傍線部は《耐え難いものになった》という意味である）。しかも岩波版では、その三行後に、「ポールはせっかく手に入れた孤独が・・・」と、孤独が実現したと言っている。こうした矛盾があちこちで見られるのである。この状況理解の問題についても、ここに書き出した以外に十以上の事例がある。

上記のように整理してまとめた同人誌を、はじめ岩波書店の文庫担当宛てに送ったのだが、何の連絡もなかった。

忙しい出版社としては、無名の執筆者の書いていることなど真面目に取り扱う気にもならないということかもしれない。しかも内容的にかなり面倒くさそうなことということになれば、なおさらのことである。

そこで少し戦法を変えて、同じ出版社の別の部門に冊子を送ってみた。すると、そこからはすぐに返事がきた。当方が指摘した点については、文庫編集部に連絡したが、昔のことなので、編集作業の詳細については分からないだろう。当方への連絡は、文庫編集部から行くことになる、という内容だった。その一、二日後、今度は文庫担当から、「ご提起いただきました内容につきましては、今後時間をかけて検討させていただきます」との返事が届いた。本稿冒頭に紹介したような、単なる地名の書き間違いといった単純なものではないので、時間をかけてというのは、その通りだろうとは思いますが、検討の結果は、一体どのような形になるのか気になるところである。

第三十六号を送った知人から、筆者の言うところを確かめようと書店に行ったが、店頭から当該文庫が姿を消していたとの連絡があった。これだけの誤りがあるのだから、とりあえず商品とはしないとするのは当然としても、それで出版社としての責任を果たしたことになるのだろうか。

なぜなら、今まで、当該文庫で「恐るべき子供たち」を

読んだつもりになっている人たちが大勢いるからであり、しかもその人たちの多くは、内容がよく理解出来なかったのは、自分の理解力の悪さが原因と思っっているからであり、学校はじめあちこちの図書館には、今でも当該文庫が残っていて、これからも、若い人たちが、何の疑いもなくそれを読むと思うからである。特に、この作品は、フランス文学への（いや、文学一般への）言うべきか？）入門書ともいべき作品なので、このまま無残な姿を晒し続けるかと思うと、読者にはもちろんのこと、原作者にも翻訳者にも気の毒な気がしてくるのである。

いや、それだけではない。筆者の手元にある著名なフランス文学者の手になる文学案内には、この作品が岩波文庫で読めると紹介されている。名訳だと推薦してはいないので、間違ったことは言っていないが、もし筆者が紹介するとしたら注釈をつけるところである。おそらく、このフランス文学者は岩波版では読んではおらず、岩波だから、と安心して紹介したものと思われる。彼もまた、私たちと同じ被害者ということになるのだろうか？

本稿を執筆中、翻訳の問題点についての二つの指摘を目にする機会があった。

一つは、「カラマーゾフの兄弟」の新訳出版を知らせる

出版社の新聞広告で、「・・・本邦十六番目となる新訳が登場！日露の作品研究の成果、歴代の邦訳、英・仏訳等をも参照し、様々な（誤訳）を発見しつつ丹念に原文を解釈した新訳・・・」の一文、もう一つは、レイ・ブラッドベ

リーの新訳版「華氏451度」（伊藤典夫訳 早川書房）の「訳者あとがき」にあった、「宇野氏（旧版の訳者）は早川書房で何冊も訳書のあるベテラン翻訳家である。しかし『華氏451度』ではどうやら下訳者を使ったようで、おそらくその下訳者を尊重したのだろう、妙に腰砕けの

（日本フランス語・フランス文学会及び日本出版学会）にも送ってみたが、今のところ何の返事もない。いずれも、学会事務局に送ったので、先生方の手に届いていないということかもしれない。

前者については、HPに、「日本におけるフランス語・フランス文学研究の進歩発展とその普及のために1963年に設立されました」とあったので、筆者の指摘は「普及」にかかわるのではないかと考えたのである。きっと同業者の間では当該文庫の誤訳については周知の事実で、改めて取り上げるまでもないということなのかもしれないが、文庫本は、研究者のためというより一般の人が親しむ書物なので、「普及」という点では、この学会にも関係がないこと

かったるい訳文になっていた。」の一文である。前者については、専門家が長年の研究の末に発見した誤訳ということなら、それをもって旧訳者を責めることはできない。しかし、後者にある「下訳者」についてはどうだろう。大先生が、お弟子さんや学生さんに翻訳の下請けをさせることがあるらしいという話は聞かないでもなかったが、堂々と、作品名と訳者名をあげて指摘されると、旧訳を読んできた身としては何とも情けなくなるのである。ただし、新訳者の指摘は「腰砕けのかったるい訳文」とあり、必ずしも誤りとは言っていないので、岩波ほど罪は重くないということなのかもしれない。

八つ当たりのと思われるかもしれないが、筆者は、岩波書店に送ったのと同じ同人誌を、関係すると思われる学会

後者については、HPに、「私たち日本出版学会では、出版およびそれに関連する事項の調査、研究を行い、出版文化の向上に資することを目的として活動しています。」とあるので、送ったのである。素人が見てもこれだけの誤りのある書物なので、当該書を絶版にすることは当然としても、すでに広く出回っている書物についてどう処理することが出版文化という観点から見るとき適切なのか、教える